

令和5年度（2023年実施）大学入学共通テスト
「英語（リスニング）」について

1. はじめに

2021年1月に大学入学共通テスト（以下、共通テスト）が開始され、今年度で3年目となった。全ての教科において、知識ばかりを求めるのではなく、思考力や判断力を問う問題とするべく、英語も2020年度まで実施されていた大学入試センター試験（以下、センター試験）から、リーディング・リスニングともに形式・分量・配点等が大きく様変わりした。実際に目的に沿った内容となっているかどうか、一昨年、昨年に引き続き、今年度も英語、特に以下ではリスニングに関して検討した結果を報告する。

結論から述べると、今年度のリスニングに関しては出題形式・傾向など、全体としてほとんど例年から変化は見られなかった。一部で、昨年度はイラストを並び替える問題だったものがグラフを参照する問題になるなど細かい変更はあった（第4問A）が、難易度も過去2年間とほぼ同程度、あるいは易化したといってもよいと思われる。平均点は62.35点で、初年度の共通テストから年々平均点が上昇していることから、傾向に慣れてきた結果、易しく感じた受験生もいたと推測される。

以下に、今回を含めた3回の共通テストの基本情報をまとめている（参考として最後のセンター試験が実施された2020年度の結果も記載している）。

	大問数	設問数・マーク数	平均点
2023 共通テスト（本試験）	6	37	62.35
2022 共通テスト（本試験）	6	37	59.45
2021 共通テスト（第1日程）	6	37	56.16
2020 センター試験（本試験）※参考	4	25	57.56 (100点満点換算)

今年度も、問題によっては図表やグラフから読み取った情報と、聞き取った情報とを合わせて答えを導き出す必要があることから、限られた時間で素早い情報処理が重視されているのは例年と変わらない。また、センター試験からの大きな変更点である、音声の再生回数が2回と1回の混在型となっていることや、イギリス英語や英語を母語としない話者による読み上げが採用されていることも、昨年度と同様であった。

次のポイント解説では、具体的に問題を例にあげ詳しくみていくこととする。

2. ポイント解説

・第2問 問9

選択肢にそれぞれ紙コップ・ペットボトル・ビン・カンとゴミ箱の絵が与えられ、女性が自分の持っているゴミをどのゴミとして分別すればよいか、男性に尋ねている状況である。正解選択肢に描かれている **can** (缶) という単語が会話文中に表れず、**this** や **it, here** などの指示語が使われていることから、会話の中でそれらが何を指しているのかを正確に追っていき、消去法で選んでいくという点で他の問題とは異なっている。**Man** の発話 “**No, that one is for glass.**” の **that one** についても、会話文の中で明確に言及されていない「ゴミ箱」を指していることを理解していないと、**glass** に惑わされてしまう可能性がある。単語単位の聞き取りにとどまらず、会話の内容を正確に理解することができるかを問うよう、工夫がなされていると思われる。

・第5問

300語弱ある講義だが一度しか読まれず、また2問ある英文の内容一致問題の各選択肢も短くはないので、リスニング力はもちろんリーディングの力も必要になる。また音声で話されている語句が、与えられている情報や選択肢において他の表現に言い換えられていることも特徴的である。

一方で、ワークシートに入れる適切な語を問う問30, 31は、問32, 33の選択肢やグラフにそれぞれ答えが記載されているため、ヒントになり得てしまうという点で、もう少し作りに工夫が必要ではないかを感じる。また、問32, 33の選択肢には、音声を聞かなくても常識で判断できてしまうものもあるように思われる。

・第6問

当大問の特徴は、それぞれの会話の途中で発話者の意見が変わることがあるという点である。Aは親子の会話で、最初は母親が息子のソロハイキングに反対であったが、息子の説明により考えが変わっている。Bは4人の会話で、**Mary**は最初会社の近くに住むことを予定していたが、お互いの会話を通して考えが変わり、後半で “**Hmm, now I have to think again.**” と述べている。会話の全体を通して話者の意見や気持ちの変化、会話の概要や流れを正確に理解する力が問われていると考えられる。

3. まとめ

今年度も、多岐にわたる場面設定から対話を聞いてそれぞれの立場や状況を判断する力や、講義を聞いて要点を把握し、情報を取捨選択する力が問われている問題となっていた。また昨年度に引き続き、異なったアクセントをもつ英語話者により文化的な多様性が示されているのも、世界中の人々がコミュニケーションの手段として英語を活用している現状を反映しようとする意図がうかがえる。

しかしながら、昨年度とテストの出題形式や内容にほとんど変更がない、ということは、課題も改善されていない、ということに他ならない。

特に、昨年度も指摘したことではあるが、読み上げ回数が大問ごとに異なることの不自然さである。たしかに英語を使用する実際の場面においては、「瞬時に判断すべきこと」と「深い理解や思考を必要とすること」が存在する。しかし、現行の共通テストは第1問・第2問の「瞬時に判断して答えを出す必要のある問題」が2回読まれ、読まれる英文量も増え慎重に考える必要のある後半の「深い理解や思考力が必要な問題」が1回しか読まれておらず、実際の場面を想定しているとは言い難い。このテスト構成のバランスで、リスニングの力を正しく測る適切な問題と言えるのかどうか、再考する必要があるのではないかと考える。

また、この3年でリスニングの平均点が上昇していることについては、リーディングとリスニングの配点比率が4:1であったセンター試験から1:1に変更になったことから、以前よりもリスニング学習に重きを置くようになったことは当然あるだろう。しかし、リスニングの平均点が年々上昇しているのは、受験生が過去2回の共通テストで傾向のある程度つかみ、対策を進め、形式に慣れたことが大いに関係していると思われる。よって、この平均点の上昇をもって「受験生のリスニング力が向上したから」と結論付けるのは早計であり、それを検証するには、このテストを受験した層が大学生、社会人と進む中で、学習してきたことがどれだけ実際の場面で役に立っているのかをみていく必要があるのではないだろうか。

令和7年度以降新しい学習指導要領に対応した共通テストが行われるにあたり、2022年11月に試作問題が公表された。リスニングの公表内容としては現在の共通テストの第5問を踏襲したもので、7設問あるうちの1問は、現在の形式である英文選択肢の内容一致問題から、講義を聞いたメンバーがそれぞれ述べる内容が講義と合致しているかを問う新しい設問に差し替えられており、この試作問題を見る限り、英文を「読む」よりも「聞く」ことにより焦点が当てられたものとなっていた。それ以外に関しては、基本的には現行の共通テストとほとんど変わっておらず、リスニングに関して大きな変化は当面ないと予想される。しかしながら、実用的な場面での対応力や、複数の情報を照らし合わせて素早く答える能力だけではなく、近年社会で取り上げられている話題なども取り入れながら、じっくり英語を聞いて設問に答えるような問題がもう少し増えてもよいのではと考える。大学入学を目指す受験生が受けるテストとしてどのような問題が適切なのか、読み上げ回数の検討なども

含め前向きな議論が今後もなされ、よりリスニング力を測るのに適した問題が作成されることを期待したい。

以上

<参考資料>

- ・大学入試センターホームページ
「令和5年度大学入学共通テスト実施結果の概要」
「大学入学共通テスト問題評価・分析委員会報告書」